

『Mind Charging』

第44回 発行：入試広報室 発行日：令和2年5月29日

野口英世の名言



人は能力だけでは、この世に立つことはできない。

たとえ、立身しても、機械と同様だ。

人は能力と共に徳を持つことが必要である。

野口英世と言えば、やはり千円札のイメージが強いですが、細菌学の研究者として『黄熱病』の研究で知られ、数々の論文を発表しています。彼は1歳の時に左手に大やけどを負い、手術によってそれを克服することができたことで、医学の素晴らしさを感じて医師の道を志すことになったそうです。実体験によって興味を持ち、自分の生きる道を見出したということになります。

今回の言葉から、彼自身が自分の道を切り開いていく中で様々な性質の人を見てきたのだろう、そして自分自身に言い聞かせながら努力を重ねていったのだろうと想像できます。『人の振り見て我が振り直せ』ということわざにも似た要素を感じます。

自分の持つ能力を磨き、成長させるための努力をすること。自分の持つ能力を、自分の利益にのみ執着したり、損得で行使するかどうかを判断するのではなく、常に『利他の精神』を持って正しく行使できるような判断ができる『人間性』や『人格形成』の重要性を知ったことが、彼にとっての一番の研究の成果だったのかもしれませんが。今の私たちにとって非常に重要な考え方であり、時を超え、彼にそれを試されているような気がします。(編集委員：入試広報室 鈴木)

野口 英世(のぐち ひでよ、1876年(明治9年)11月9日 - 1928年(昭和3年)5月21日)は、日本の医師、細菌学者。栄典は、正五位・勲二等旭日重光章。学位は医学博士(京都大学)、理学博士(東京大学)。称号はブラウン大学名誉理学博士、イエール大学名誉理学博士、パリ大学名誉医学博士、サン・マルコス大学名誉教授・名誉医学博士、エクアドル共和国陸軍名誉軍医監・名誉大佐。キリスト者。福島県耶麻郡三ツ和村(現:耶麻郡猪苗代町)出身。高等小学校を卒業して上京し、済生学舎(日本医科大学の前身)に通い、医術開業試験に合格して医師となった。渡米してペンシルベニア大学医学部の助手を経て、ロックフェラー医学研究所研究員となった。主に細菌学の研究に従事し、黄熱病や梅毒の研究で知られる。数々の論文を発表し、ノーベル生理学・医学賞の授賞候補に三度名前が挙がったが、黄熱病の研究中に自身も罹患し、1928年(昭和3年)5月21日、英領ゴールド・コースト(現在のガーナ共和国)のアクラで51歳で死去。

(Wikipedia 参照)